

亀長：余談ですが、学問的な意味でも、またそうでなくて感傷的な意味でも結構ですが、先生方にお好きな歴史上の人物などいかががってみたいとの要望が学生の間にあったのですが・・・（笑）。

城戸：ははは（笑）

亀長：好感をもったとかでなくとも強く関心を持った人物など雑談としておきかせねがえればと思うのですが・・・幼少期の憧れ等、先生方でもおありなのでしょうか？

城戸：やっぱりそういうのは若いときにそういうのがあるんじゃないのかなあ。好きな人物とか、興味をもって調べてみたいとかというのはちょっと違うかもしれませんがねえ。どういうものか、歴史書の上で見るとどちらかといえば悲劇的人物の方が研究書というのはいくつもあるような気がするし、その研究も非常に分厚いものが最近多いような気がしますねえ。フランス史でいえばナポレオンなんていうのは確かに随分いろいろ研究があると思うんだけど、イギリス中世史でいうとね、無能で悲劇的だった王様の研究が最近多いような気がしますね。しかも分厚いのが。

亀長：例えばジョン王とかでしょうか？

城戸：いやジョンなんかではなくて、エドワード2世とか、ヘンリー6世とかね。そして書いてる人は「暗い感じがして、実際研究していると陰気でたまらない」って書いてあるんですよ（笑）。非常にそういう微に入り細に入った研究というのはいくつもあるんですよ。まあでも若いときに関心を抱くというのはそういう人間じゃなくて、もっと英雄的な、あるいは、なんていうかなあ、理想的な人物に憧れを抱くっていうか、興味をもちますよね。だから、ちょっとそういう点が違ってくるんだと思う。けど僕は今悲劇的な人物に関心を持っている人がいるっていう意味でいってるんじゃないですけどね。若い頃は私はゲーテっていうのに心酔してました。この頃あんまり読みませんけど。

遅塚：ゲーテの何が一番好きですか？僕はあんまりゲーテは読んでないんだけど。

城戸：エッカーマンの「ゲーテとの対話」とか。詩も読みましたし。もちろん独文の方がやられるほど読んだ訳じゃなくって。そういうものを好きでちょっと読んだという程度のものですけれども。

遅塚：僕はねえ、仕事の上でロベスピエールなどいろいろ調べたけれども、好きでやるとはちょっと違うんで・・・。突拍子もないんですけど、若いときから僕が好きだったのは、中国のね、項羽っていう人物がいますね。さっきの悲劇的になっていうんじゃないけれども。僕はあの人間大好きなんです。史記に出てくる限りのことで、本当はどうだか知らないけれど。調べたわけじゃないんだから。どういう所

が好きかっていうとね、鴻門の会っていうのを皆さんも聞いたことあるだろうけど、ライバルの劉邦を、殺そうと思えば殺せたわけですよ。参謀長の范増はけしかけるんですけどね。でも項羽の方は殺すにしのびないんですよ。項羽が合図を出せば殺す手筈も整っていたのに。参謀長の范増は悔しがつて、こんな青二才はとても天下を論じる器ではないとかかんとかいうんだけど。殺すにしのびないってところが僕は大好きなんです。その後負けて揚子江の岸辺かなんかにたどり着くんですけど、その川越えると自分のもともと国に帰れるわけで、船宿の主人がね、船を偽造して待って、「これに乗って故郷へ帰れ」って進めるんだけど、項羽は、何千人の子弟を連れて国を出て行ったのに、死なせちゃって、自分だけ国へ逃げ帰ることはできない、郷里でまた自分を王にしてくれるといっても、何の面目があつて親にあわせる顔があろうかといつて断るんですよ。それで劉邦の軍隊にころされるわけなんですけれども、そういう生き方っていうのは僕は非常に好きで、まあ好みの問題ですけど（笑）。項羽っていう人物がとても好きなんです。好きな人物なんてそれぐらいのもんだね（笑）。あと、興味持つてる人はいろいろいますね。例えばジャンヌ・ダルクっていうの、割と興味があるんですよ。調べようってほどの気は起こりませんが。いろんな人が調べてますし。この間もね、ジャンヌ・ダルクを扱った「ひばり」って芝居を見ましたけど、いろんな解釈があるって思いましたね。彼女については材料少ないんでしょ？日本では高山（一彦）先生が一番の専門家ですけど。史料が非常に限られているらしいから、ほんとはどんな人間だったかわかんないらしいけど、何となく好きですね。ほくはねえ、そう思った理由というのは、ルアンの町の文書館に僕は長いこといましたから、朝晩ジャンヌ・ダルクの石像のところ、焼き殺されたところを通つたからへんなふうになつちやつたのかもしれないけど（笑）。興味はあるんだけど、そのうち城戸先生が百年戦争をお書きになると登場するんでしょうけど（笑）。

城戸：いや僕は登場させないですよ（笑）。

遅塚：材料は乏しいでしょうねえ。高山さんの他には木村さんが多少書いておられる程度でねえ。ほか日本でやつてる人いないかな？

城戸：あんまりいないんじゃないかな。

遅塚：堀越君はやつてないかな？

城戸：多少はやつてるかもしれないですね。でもジャンヌ・ダルクっていうのは大変若くして亡くなった女性だから、あまり陰影とか複雑なわかりにくい面とかそういうのはないでしょう？

遅塚：ないでしょうね。

城戸：そういう意味では同じ頃のフランスだったらルイ11世っていうのは非常に研究し甲斐があるんじゃないかな。

遅塚：ああ。あれは面白いねえ。ああいうなんともいえなく奇々怪々というか、陰々滅滅  
というか、いやらしいというか、ああいうのは調べ甲斐があるでしょうね。

城戸：イギリスではああいうタイプの人はいないですね。ヘンリー7世がちょっと似てる  
かもしれないけど。

遅塚：大陸の人間の方がひねくれてるよね。複雑で怪奇で。確かにそうかもしれないよね。

城戸：ええ、ええ。ルイ11世っていうのは僕は研究し甲斐があると思うなあ。

遅塚：あるでしょうね。研究し甲斐があるという点ではそっちの方が面白い。

城戸：最近演習なんかでフランス史のものを読んでるせいかもしれないけど、中世のフラ  
ンスには面白い人物が沢山いると思いますね。

遅塚：そりゃあいるでしょう。

城戸：イギリス人というのはある意味ではもっと単純で、あんまり複雑なのはいないと  
思いますよ。

遅塚：そうかもしれませんね。シャルル7世なんてのもある意味ではかなり複雑な性格を  
もってますものね。ジャンヌ・ダルクよりはシャルル7世を調べた方が、ある意味  
では面白いでしょうね。

亀長：イギリスにはそういう人物が少ないのでしょうか？調べ甲斐のある人物が・・・

城戸：いないことはないと思いますけどね。やっぱりフランスっていうのはその頃のイギ  
リスに比べれば、はるかに大きな国だしね。その中には中間権力がたくさんいたわ  
けで、その中間権力の持っている力っていうのはイギリスに比べればはるかに大き  
いわけでね。そういうのを操作していく時一番上に立っていく人間はね、何という  
のかなあ、たいした手腕だと思う。その手腕の複雑さっていうのに似たものはイギ  
リスでは見つけられないですよ。イギリス人はそれに比べれば単細胞だと思うな。  
はるかに（笑）。もっと統治し易かったと思う。イギリスの方が。フランスはだか  
らそういう体制の上に立ってああいう中央集権を達成したわけだけれども、その上  
に立ってる人間っていうのは、その人間一人でやってた訳じゃなくて、まわりに助  
言者がたくさんいて、そういう人達の意見をとりいれながらやってたんでしょうけ  
ど、まあそうだなあ、フィリップ2世にしても、ルイ11世にしてもああいう人間っ  
ていうのはイギリスにはいないですね。

遅塚：なるほど。単純なアナロジーは何だけれど、日本と中国の違いなんかもそれに似て  
るわな。日本には中国大陸のああいうすげえのはあんまりいないわな（笑）。

城戸：そう。そういう王様達に助言を与えていた段階の人物にもフランスには面白そうな  
人物がたくさんいそうな気がしますね。

遅塚：そうかもしれませんね。

城戸：面白いっていうのは、心酔するとか理想化するとかじゃなくてね、非常に多面性が  
あってね、簡単にはつかまえないってことですよ。

遅塚：それは革命期だってね、まあロベルピエールなんてのは単純な奴でたいして陰影なんかないんだけど、シェイエスだとかタレーランだとか、まあフーシェは有名ですけど、なんだかつかまえどころのないもぐらみたいな奴がいるわけですよ。ああいう複雑怪奇な人間っていうのはいるわけですよ。非常に陰影に富んだ奴も出没するわな。

《閑話休題：その2～乙女の祈り》

城戸：音楽談義ですか。

亀長：先生は今もずっとバイオリンをなさってるんですか。

城戸：いえ、今はやってません。イギリスに行ったときに、向こうでやれないだろうと思って、それから荷物も多くなるという理由もあって日本に置いてきて、それ以来事実上やめてしまったということですね。

遅塚：じゃあ、イギリスに行かれる前、大分お若い頃になさったんですか。

城戸：そうですね。15の時に始めて……

遅塚：それは個人的にレッスンをお受けになって……

城戸：はい。音楽をやりたいっていうのは子供の頃からの私の願望であって……

遅塚：ああ、そうですか。

城戸：本当はピアノを習いたかったんですよ。けどももっと簡単なものと思って。実際はどちらが難しいのか、良くわかりませんがね。10年くらいですね。

遅塚：10年。はあ。じゃあ10年なされば相当あれでしょうね。僕はまだ残念ながらうかがう機会がないんで。なにか特にお好きな作曲家とかありますか。

城戸：ははは（笑）。まあ、そういうのは……

遅塚：古典派ですか。

城戸：まあ、古典派も新しいのも聞きますがね。

遅塚：いや、御自分でなさるときにね。

城戸：演奏するときですか。演奏はやっぱりどれをやっても難しいですからねえ。なかなかどれでも思うようになってのはいかないですよ。

遅塚：イギリスに持っていかれたらよかったと思いますがねえ。

城戸：いやあ、下宿したらちょっとやれないですよ。

遅塚：ああ、そうですか。

城戸：成瀬さんはね。ずっと続けてやっておられますよね。だけど僕はちょっとああいう風

には続けられなくてやめてしまいましたけどもね。少しまたやろうかなとも思うけれども、楽器をまた整備し直さないかね。

一柳：成瀬先生もバイオリンを？

遅塚：オルガンとピアノとね……

城戸：それから管楽器もなさるんじゃないですか。木管も。

遅塚：そうですか？

城戸：クラリネットか何かなさるんじゃないですか。

遅塚：いやそれは知らない。成瀬さんは教会で日曜日にオルガンを弾いておられて……

城戸：ええ。基本はそうですけどね。

亀長：遅塚先生は楽器はなさらないんですか？

遅塚：いや、なさるといふほどではないですが……

城戸：ピアノを少しはなさったんでしょ？

遅塚：うん。あのね、助手になった時にね。要するに月給をもらったわけです。それまでは大学に行きながらもちろん雑なアルバイトをやって少しはお金を稼いでいましたけれども、月給というものを初めて手にしたのは助手になって。で、僕は（ピアノを）やりたかったんだけど、レッスンにお金がかかるでしょ。で、月給をとるようになったんで、近くに音楽学校の学生さんがいたんでレッスンをとったんです。けども非常に進みが遅くってね。バイエルの100手前。でも下手なりに好きでね。それから間もなく留学したんですけど、田舎の村でね史料調査で公証人の所に行かずと泊り込みで仕事してたんですけども、宿屋の隣に古道具屋があってピアノがあるんだわ。それでそこの娘さんがね、また教えてくれたんだけどね。その頃はフランスの田舎じゃ日本人なんての顔見たことないわけでしょ。で、向こうが珍しがって、変なのがとにかくピアノをいじるって非常に感心されましてね。で教えてやるってんでね。あの「乙女の祈り」っていう大変ポピュラーな曲があるでしょ。あれをね、古道具屋の娘さんにその古道具のピアノでね、また教えてもらったの。その程度。ただ僕は聴くのは非常に好きなんで。今まで実は都立大学にいた時はね、あそこは夜の授業がありましてね、それだもんですから会議も結構夜やることがあるんで、音楽会に行こうと思っても切符買つといつてもだめになっちゃうとそれがね、ネックだったんですが。幸い東大に来たら、余程のことがない限りね、夜がつぶれるってことはないんで、僕は一人で——一人で音楽会行くってのは、つまんないっていやあつまんないけれども——時々行きますよ。

池口：城戸先生は、ホールに音楽会を聞きに行かれたりということは……

城戸：そうですね、たまに行きますけれどもね。まあ、自分から求めていくってことは滅多にないけれども、切符がまわってきたときとか、それから武蔵野市民文化会館っていうわりに良いホールが近くにあって、そこでやるものは安くやってくれますからね。そこでやるものを1年に1回くらい行くっていう程度ですね。僕はなかなかねえ、一人で行くって気持ちにならないんで。家族と一緒にいきたいって思うと、なかなか日程が合わないとかいろいろあって……。まあ専らラジオのFMで聞いてますよ。